

「グローバル研究」の構築に向けて

——共振するグローバリゼーションと
ローカリゼーションの再対象化——

上 杉 富 之

はじめに

人、モノ、カネ、情報等が地球規模で急速かつ大規模に移動し、その結果、政治や経済、社会、文化などの再編成が共時的に進行する現象ないし過程がグローバリゼーション（グローバル化）と呼ばれるようになってすでに久しい⁽¹⁾。特に、1990年代半ば以降はこうした現象ないし過程が顕著で、グローバリゼーションという言葉は今や学界やマスメディアのみならず、私たちが日常的に使うごく普通の言葉となっている。

世界を席卷するグローバリゼーションという現象ないし過程について実業界や学界のみならず一般の関心が集まり始めたまさに1990年代初め、グローバリゼーションの波が到達したローカルな場において、グローバリゼーションがローカリゼーション（ローカル化）と同時に生じていることに注目した社会学者がいた。イギリスの社会学者、ローランド・ロバートソンである。ロバートソンは、当時、世界市場に進出して急拡大しつつあった日本企業が市場戦略として用いていた和

二二八

「グローバル研究」の構築に向けて

製英語・グローカリゼーションに着目し、グローバリゼーションがローカリゼーションとともに進行し、しかも相互に影響を及ぼしながら進展する現象ないし過程であることを強調した⁽²⁾。

ロバートソンがグローカリゼーションという概念に注目した背景には、グローバリゼーションという現象ないし過程の中で、グローバリゼーションの実質的な起点としての「中央」や「中心」に対して「地方」や「周縁」の相対的な位置づけを上昇させようとする意図があったと思われる (Featherstone and Lash 1995: 3-5 参照)。そのこともあってか、地球規模に展開する多国籍企業のマーケティング戦略としてのみならず、地域に根差しつつ地球規模商取引を目論む地方の中小企業、地球規模の連帯を模索する人権や環境に関連した非政府組織 (NGO や NPO など)、さらには地方分権を目指す地方自治体・政治家までもが時としてグローバリゼーションという言葉のスローガンやモットーとして使うようになってきている⁽³⁾。

しかしながら、グローカリゼーションという用語の普及にもかかわらず、あるいは逆に普及したがゆえに、グローカリゼーションはあくまでもグローバリゼーションに付随して起こる現象ないし過程と考えられ、場合によってはグローバリゼーションの一部としかみなされず、それ独自の研究領域として扱われることはなかった。その結果、グローカリゼーションを強調したロバートソンの当初の目論見や意図とはかけ離れた使い方がなされ、今では、特定の現象や過程を浮かび上がらせ、それを的確に分析する概念としての有効性をほとんど失っているように思われる。

そこで、本小論ではまず、グローカリゼーションという言葉ないし概念が提唱された当初の意味や意義を確認し、その後の普及や拡大に伴うそれらの変化を跡付ける。その上で、グローバル化がすでに常態と化した現代の社会的・文化的諸現象ないし諸過程の特徴を有効に記述・分析する概念として、グローカリゼーション概念を改めて定義することを試みる。私は、グローカリゼーションという概念を中核に据えた「グローバル研究」(glocal studies)の構築を構想しているが、その意味で、本小論はグローバル研究を構築するための先行諸研究の整理ということになる。

1. グローカリゼーション

グローカリゼーションないしグローバル化という言葉は、1980年代以降に世界的潮流として顕著となった経済や政治のグローバリゼーションないしグローバル化と、それに対抗するものとして1990年代以降にわかに脚光を浴びることとなったローカリゼーションないしローカル化という2つの言葉の合成語として作られたものである。そこで、まず、グローバリゼーション及びローカリゼーションに関する議論を確認し、グローカリゼーションという言葉ないし概念の提唱に至る経緯を明らかにしておきたい。

1) グローバリゼーション

グローバリゼーション(globalization)という用語は、1990年代以

降、特に東西冷戦の終結後、世界の政治や経済、社会、文化があたかも地球規模の一つの体系に統合される現象ないし過程を意味する用語として導入された (Abercrombie *et al.* 2000)。とは言え、後にグローバル化と呼ばれるようになった現象や過程は、早くも1960年代初頭には注目を集めるようになっていた。

1960年代の初め、マーシャル・マクルーハン (1986 [1962], 1987 [1964]) は、ラジオやテレビ等にはじまる電子的なマスメディアによって世界中からコミュニケーションの障壁が取り払われつつあることに注目した。そして、地球全土があたかも一つの村社会のごとくになるという意味から、来たるべき社会を「グローバル・ヴィレッジ」(global village) と表現した。

その後、1980年代に入り、国境を越えて地球規模で活動する多国籍企業等の経済活動が顕著となり、あるいはまた、地球規模の環境問題や人権問題が議論されるに連れてグローバル化という言葉・概念は徐々に普及して行った。

そして、周知のごとく、1992年のソヴィエト連邦の解体とともに東西の冷戦構造も崩壊し、人、モノ、カネ、情報の地球規模での流動が飛躍的に増大するに至り、グローバル化は現代社会を象徴する揺るぎない概念として定着したと言ってよい。

ところで、1990年代以降、グローバル化が常態と化すに至り、特に文化の面で、グローバル化に対する抵抗ないし反対が世界各地で明確な運動の形を取るようになってきた。曰く、グローバル化は合理性や効率等を最優先するという意味で「アメリカ

化」(Americanization) ないし「マクドナルド化」(McDonaldization)⁽⁴⁾に他ならず、それが今や地球上の至るところに到達し、地域や地方の「伝統的」で「固有」の社会や文化を圧倒し、消滅させると言うのであった。その結果、地球上の多種多様な社会や文化がアメリカ流に統一され、均質化・平準化が進むものと危惧された。こうした考え方を、Macionis and Plummer (2008) にならって、ここでは仮に、「グローバリゼーションの均質化論」⁽⁵⁾と名付けておこう。

グローバリゼーションの大波が世界の隅々にまで到達し始めた1980年代以降、世界各地でグローバリゼーションによる社会・文化の均質化が急速に進んだことは否めない。アメリカの「ローカル」(地域的)な食べ物に過ぎなかったマクドナルドのハンバーガーやケンタッキー・フライドチキンが、1980年代以降、瞬く間に世界を席卷し、今やこうしたファストフード店が存在しない大都市を探すことが困難なほどに世界中で普及しているのは周知のことである。

しかしながら、その一方で、マクドナルドのハンバーガーが日本でテリヤキバーガーとなり、インドでベジ・バーガー(野菜バーガー)となって「ローカル化」(土着化ないし現地化)されていったように、グローバル化した食べ物が必ずしもローカルな食べ物を圧倒して消滅させたわけではないことも事実である。グローバル化した要素とローカルの要素とが融合ないし「雑種化」していく現象もまた見られるのである。後に詳しく述べるが、グローバリゼーションに関する実態が明らかにされるにつれ、グローバリゼーションの波はしばしばそれが到達した地域や地方の「伝統的」で「固有」な社会や文化要素と混じ

「グローカル研究」の構築に向けて

りあって新たな雑種文化を生成し、あるいは、また、時として、そうした要素を蘇えらせる活性化することも明らかとなった。こうした側面を強調する考え方を、Macionis and Plummer (2008) にならって、ここでは仮に、「グローバリゼーションの多様化論」⁽⁶⁾ と名付けておこう。

グローカリゼーションに関する以上の、言わば相反する二つの考え方について、Macionis and Plummer (2008: 847–848) は相違点を表1のようにまとめている (表1 参照)。

Macionis and Plummer の表に示されているように、グローバリゼーションの評価ないし特徴付けは、グローバリゼーションが地球規模

表1 グローバリゼーションに関する「均質化論」と「多様化論」

均質化としてのグローバリゼーション globalisation as homogenisation	多様化としてのグローバリゼーション globalisation as diversification
文化的帝国主義 cultural imperialism	文化的小惑星化への指向 cultural planetisation
文化的従属 cultural dependence	文化的独立 cultural independence
文化的支配／被支配 cultural hegemony	文化的相互浸透 cultural interpenetration
自律 (独立) autonomy	混交、雑種化 synthesis, hybridisation
単一の近代化 modernisation	複数の近代化 modernisations
西洋化 Westernisation	地球規模のごたまぜ global mélange
文化的同調化 cultural synchronisation	文化的クレオール化／横断 creolisation/crossover
世界規模での文明の意識 world civilisation	地球規模での人間界の意識 global ecumene

(出典：Macionis and Plummer 2008: 847–848)

で社会や文化を均質化すると見るか（「否定的な見方」）と、その逆に、多様化すると見るか（「肯定的な見方」）で大きく異なっている。

この表で特に注意を促したいのは、表の左側の列、すなわち、グローバリゼーションによる均質化の側面を強調する見方は、グローバリゼーションの起点となる「中心」の観点に立つことである。これに対し、右側の列、すなわち、グローバリゼーションの多様化の側面を強調する見方は、グローバリゼーションが到達する「周縁」の観点に立っている。後述するように、こうした2つの見方のうち、グローバリゼーションの多様化としての側面を強調し、周縁におけるローカル化のあり方に注目しようとする見方こそがグローカリゼーションないしグローカル化という概念の提唱に至った考え方に他ならない。

2) グローカリゼーションの提唱

1991年版の *Oxford English Dictionary of New Words* によると、グローカル (glocal) ないしグローカリゼーション (glocalization) という言葉は、1980年代、世界市場に進出していった日本企業が使用していたマーケティング用語に由来するという⁽⁷⁾。当時、地球規模で世界各地に乗り出して行った日本企業は、その製品を現地のニーズに合わせて「現地化」していった。企業がグローバル（地球規模）に展開し、商品をローカル（地方、地域）のニーズに合わせることから、こうしたマーケティング戦略をグローバルなローカル化 (global localization)、すなわちグローカル化という造語で表わしていたというのである。

二二二

ビジネス界のマーケティング用語に過ぎなかったグローカリゼーシ

「グローバル研究」の構築に向けて

ジョンを、社会学等の学術用語として使用することを初めて提唱したのはイギリスの宗教社会学者であるローランド・ロバートソンであった⁽⁸⁾。

したがって、ロバートソンの功績は、グローバルやグローカリゼーションという言葉ないし概念に注意を喚起したことではなく、むしろ、「グローバリゼーションの均質論」が吹き荒れていた1990年代初頭に、こうした用語を当時の社会・文化現象を説明する分析用語として導入し、「グローバリゼーションの多様化論」を精力的に展開したことにある。

ロバートソン（1992, 1995）によると、1980年代～1990年代初頭のグローバリゼーションに関する議論の主流はおおむね、グローバリゼーションがローカルな場にある個別の文化を抹殺し、世界を同質化・均質化してしまうというものであった。中でも、イギリスの著名な社会学者アンソニー・ギデンス（2001）は、グローバリゼーションは地球規模の近代化の延長線上に位置付けられるものであり、近代化が世界共通のある特定の（1つの）方向に向かっている以上、グローバリゼーションのさらなる浸透は世界を単一化（均質化）することに他ならないとの議論を展開した。ギデンスの考え方は当時の学界や言論界の主流を代弁するものであり、1990年代初頭までの議論はおおむね「グローバリゼーションの均質化論」であったといえることができる。

二
一
これに対し、ロバートソン（1992, 1995）は、グローバリゼーションはむしろ本質的・内在的にローカルな場における多様性を増大させるという見方を取った。ロバートソンは、宗教現象を中心にして、

1980年代初頭から30年近くにわたってグローバリゼーションの問題に取り組んでいた。彼によれば、宗教にかかわるさまざまな現象や接触、変化の過程はもとより、あらゆる社会的・文化的なグローバリゼーションの現象ないし過程が、「グローバル」な運動 (globalization) と「ローカル」な運動 (localization) が複雑に絡まり合いながら同時に進行する現象ないし過程だという。そして、その結果、ローカルな場所ごとのグローバリゼーションとローカリゼーションの絡み合い、すなわち、グローカリゼーションを通して世界規模での近代化が進行する場合、それは、ローカルな場所に特有の複数の近代化として多様な現れ方をするのだと結論付けた。

言葉を換えて言うと、ギデンスらがグローバリゼーションを通して世界が1つの(均質の=単一の)近代化を達成するとみなしたのに対し、ロバートソンは、グローバリゼーションが到達した地域ごとにローカリゼーションが同時に進行するため、世界はローカルな場所に応じて異なった複数(異質の=多様な)近代化を達成すると考えたわけである⁽⁹⁾。

ロバートソンはかくして、グローバリゼーションとローカリゼーションが相互に刺激し合い同時に進行することを強調するために、グローカリゼーションという言葉・概念を社会学的な専門用語として改めて提唱したのであった。

3) グローカリゼーションの文脈——概念の拡張と変容——

すでに確認したように、1990年代初頭にグローバリゼーションの概

「グローバル研究」の構築に向けて

念が明確化し定着したのとはほぼ時を同じくして、ロバートソンらは、ローカリゼーションの同時進行を考慮したグローカリゼーションの概念を導入することを提唱した。しかしながら、周知のように、以後、グローバリゼーション概念のみが脚光を浴び、グローカリゼーション概念はしばらの間注目されることがなかった。

とは言え、1990年代半ば以降の反グローバリゼーション運動の高まりの中で、グローカリゼーションという言葉・概念が再び脚光を浴びることになった。そして、それに伴い、グローカリゼーションという言葉ないし概念は当初の意味内容を拡張・変化させていった。その結果、グローカリゼーションという言葉・概念は、今日、それが使われる文脈や状況に応じて多様な意味を持つに至っている。

グローカリゼーションという言葉ないし概念が使われる文脈は、大きく4つに分けられるであろう。すなわち、経済的文脈と政治的文脈、社会運動的文脈、そして文化的文脈である。

①経済的文脈

i) ローカルなニーズへの適合

「現地化」としてのグローカリゼーションの用法で、グローカリゼーションという言葉ないし概念の用法としては最初期のものである。

1980年代以降、地球規模で世界各国に展開していった日本企業は、経営戦略として、生産や経営の大本は日本の本社の意向に合わせつつ、同時に、進出先国で、進出先国のニーズに合わせた製

品の生産を始めるという、いわゆる「現地化」の方針を採用した。それは、「グローバルな『全体』の効果を考える一方で、現地化（ローカリゼーション）という『個』のメリットを生かすことも配慮」（伊丹 1991：127）し、「全体と個、グローバルとローカル、の両方をにらむ必要」（同所）があったからである。こうした、グローバルとローカルの双方に配慮した結果としての「現地化」という経営戦略は、「単純にグローバルなメリットだけを追えばいいのではないのだから、『グローバル』統合という言葉は使わない」（同所）で、「グローカル統合と名づけ」（同所）ていたという。そして、ソニーや日本電気はこうした経営戦略・方針のことを、「グローカリゼーション」という造語（和製英語）で呼んでいたという。

ロバートソンが、こうした日本企業の経営戦略ないしマーケティング用語としてのグローカリゼーションにヒントを得て、専門用語としてのグローカリゼーションを提唱したことはすでに述べたとおりである。

ii) 地域（地方）に根ざして地球規模で活動する

しばしば、国や県などの「中央」に対して、地域や地方の政治的・経済的な活性化や振興、ひいては、政治的・経済的地位の向上を目指すという文脈で使われる用法である。

この文脈では、例えば、「中部（地方：ローカル）の地に根を据えて頑張りながら、世界を相手にビジネスを展開する企業の姿

勢」(恩田 2002:19) や、あるいは、「ローカルから出発してグローバルな事業展開を図る」(同所) という意味合いで使用される。

iii) グローカルネットワークの構築

地域経済・地域の国内企業などのローカルネットワークと、外国市場や外国企業などのグローバルネットワークとの接続のことをグローカリゼーションということがある(岡戸 2002:30)。この種の用法は、特に環境問題において顕著で、すでに述べたように、「地域レベルで考えて、地球規模で行動する」、あるいは逆に、「地球規模で考えて、地域レベルで行動する」ことがグローバルないしグローカリゼーションの一環とみなされている。

②政治的文脈

政治的文脈では、「地球規模の統一(グローバリゼーション)に向かう一方で、ローカルレベルにおける権限の活性化、リージョンレベルにおける連携の強化が見られる。——中略——この現象をグローカリゼーション(という)」(岡戸 2002:24、括弧内引用者) というような用法がなされる。

日本では、近年、道州制の導入等、地方への政治的・経済的権限の移譲がマスメディア等で議論されるようになってきているが、この種の「地方の時代」を標榜する議論の文脈でグローカリゼーションが使われることが多くなってきている。例えば、1980年代に大分県で地域振興政策として「一村一品運動」が展開されたが、

唱道者の平松守彦前大分県知事らは、地域住民主導の地域振興運動や政策をグローカリゼーションの一環として位置付けている（平松他 1997参照）。

③社会的運動の文脈

国境を越えた水や大気の汚染などのトランスナショナルな環境問題、あるいは、国際的な人権問題を扱う NGO や NPO の社会的運動の文脈ではしばしば、「地球規模で考えて、身近なところで行動する」(Think globally, act locally) というようなことが叫ばれる。あるいは、逆に、「地域レベルで考えて、地球規模で行動する」(Think locally, act globally) ということも標榜される。こうした、グローバルとローカルの両方を視野に入れた運動方針がグローカリゼーションの理論に基づくものと位置付けられている。

④文化的文脈

文化的文脈では、グローバリゼーションによってローカルに到達した文化要素が、ローカル（地方・地域）の文化要素と接触して両者が互いの特徴を際立たせる（分節化）とともに、場合によっては結び付く（接合）現象ないし過程が見られるが、そうした現象ないし過程がグローカリゼーションと呼ばれる（前川 2004 参照）。

例えば、本来はアメリカのファストフード（迅速）のはずのま

クドナルドのハンバーガーが、老人の集う街・巣鴨のとげぬき地蔵では柔らかい肉を使ってゆっくり味わう「スローフード」化しているという（前川 2004：49）。ここでは、グローバル化した文化要素がローカルの文化要素と接合することによって新たな文化を生み出していると言えよう。

文化的文脈においては、グローバリゼーションとローカリゼーションが同時に進行しつつ分節化や接合化が生じる現象や過程がグローカリゼーションとみなされる。

4) グローカリゼーション概念の問題点

以上、確認したように、グローカリゼーションという言葉ないし概念は、それが用いられる時代や文脈、状況に応じてさまざまな意味を持つ。にもかかわらず、そうした用法にはいくつかの共通の問題点が見られる。

第一に、グローカリゼーションという言葉ないし概念が、学術用語としての再導入を試みたロバートソンの意図とは異なって用いられるようになり、分析概念としての当初の有効性が失われつつあるという点が挙げられる。

ロバートソンがグローカリゼーションという言葉をわざわざ学術用語として導入しようとした動機の一つは、当時、政治的・経済的な文脈のみで考えられる傾向のあったグローバリゼーションという現象ないし過程を、社会的・文化的な文脈からも見るべきであるとの主張があった。

政治的、経済的な文脈では、強大な「力」を持つグローバル化した要素がローカル（地方・地域）の要素を確かに圧倒し、消滅させてしまうことがある。しかしながら、文化的文脈では、グローバル化した要素がローカルな要素と結びついて新たなものを創り出すというように、互いに影響を及ぼしながら共存・共生することがしばしば見られる。こうしたグローバル化とローカル化の相互作用を、社会的・文化的文脈に焦点を当てて明らかにしようという意志ないし姿勢が、グローカリゼーションという言葉ないし概念を唱導する際のロバートソンの立ち位置であった。

しかしながら、すでに見たように、グローカリゼーションが使用される文脈は、最近、とみに経済的文脈（地域興し）や政治的文脈（地方分権）に偏っているように思われる。また、それに伴って、グローバル化とローカル化の相互作用を見ようとする意志や姿勢が失われつつあるように思える。

その結果、第二点として、グローカリゼーションによってもっとも強調されるべき、グローバリゼーションとローカリゼーションが同時に、しかも相互に影響を及ぼしつつ進行する現象・過程であるという事実への関心が薄れ、それらすべてがグローバリゼーションという言葉・概念に回収されつつあるということが指摘できるであろう。グローカリゼーションは今や、グローバル化した社会的・文化的要素がローカルな場に浸透する際に見られる現象ないし過程に過ぎないというように、矮小化されつつあるのである。

第3の問題として、政治・経済的な意味ではもちろんのこと、文化

的な意味での「中心」と「周縁」の間の「力」の非対称性（不均衡）に関する問題が挙げられる。ロバートソンがグローカリゼーションという言葉ないし概念を提唱して衆目の注意を喚起しようとしたのは、グローバリゼーションとローカリゼーションの同時進行と相互作用という事実であった。さらに言うならば、ロバートソンの試みは、事実上、常にグローバリゼーションの起点となっている「中心」（しばしば欧米の先進国）の「力」を過大評価することなく、グローバリゼーションの波が到達する「周縁」（地域・地方）の側が持つ「（影響）力」を正當に評価しようとする努力であったと思われる。

しかしながら、グローカリゼーションという言葉ないし概念は、近年、しばしばグローバリゼーションという言葉に回収されつつある。その結果、グローバリゼーションとローカリゼーションをいたずらに対置し、グローバリゼーションの持つ圧倒的な「力」を過大視したり（国際関係論や国際政治学などの分野）、逆に、グローバリゼーションを敵視して等閑視する傾向がある（民俗学や文化人類学などの分野）⁽¹⁰⁾。こうした見方は、ロバートソンが強調しようとしたグローバリゼーションとローカリゼーションの同時進行性や相互作用性を無視するものであり、グローカリゼーションという概念の有効性を著しく減じるものと言わざるを得ない。

以上の諸点を考慮し、グローカリゼーションという言葉ないし概念に本来備わっていたであろう有効性を取り戻すためには、グローカリゼーション概念を今一度定義し直し、眼前で展開している社会的・文化的文脈に対応した形で再導入する必要があると思われる。

2. グローカリゼーションの再文脈化

グローカリゼーションに関するこれまでの研究を簡潔にまとめた M. B. Steger (2009: 8–10) は、マスメディアや学界でこれまでグローバリゼーション（グローバル化）という言葉ないし概念で一括されてきた現象ないし過程を、以下の3つに分けることを提唱している。すなわち、グローバリゼーションとグローバリティー、そしてグローバル・イマジナリーの3つである。

Steger によると、グローバリゼーション (globalization) とは、国境や地域の境界を越えて人やモノ、情報、金などがグローバル（地球規模）かつ大規模に移動し、世界のすべての国や地域が一体化する一連の社会的過程である。それゆえ、地球全体を一体化するという意味で「全球化」ということもできよう。これに対し、グローバリティ (globality) とは、国境や地域の境界を越えてグローバルに（地球規模で）経済や政治、文化、環境的が密接に関連している状態や特性を意味する。また、グローバル・イマジナリー (global imaginary) は、われわれが地球規模の大きな社会に属しているという考え方ないし想像力のことを言う。

私は、これまでグローカリゼーション（グローカル化）として一括されてきた現象ないし過程についても、上に示したグローバリゼーションについての概念区分を援用しつつ、概念を区分する必要があると考える。すなわち、グローカリゼーション（グローカル化）とグローカリズム、グローカリティ、そしてグローカル・イマジナリーという

概念区分である⁽¹¹⁾。以下、それぞれの概念区分について述べ、そうした概念区分を導入することによって新たに何を対象化し、何を記述・分析し得るのかを明らかにしておきたい。

1) グローカリゼーション (glocalization、グローカリゼーションの過程)

グローカリゼーションとは、グローバリゼーションによってローカルな場に到達した社会的・文化的な要素が、ローカルな場の需要や環境に対応して作り変えられたりローカルな社会・文化的な要素と接合する現象ないし過程を意味するものとする。こうした現象ないし過程は、すでに述べたように、グローバリゼーションとローカリゼーションが同時に、しかも相互に影響しつつ進行する過程である。

グローカリゼーションという概念によって、グローバリゼーションの波に乗ってローカルな場（地方）に到達した製品や技術、主義主張、思想などが、ローカルの文脈に応じて変更や修正を加えられる点を強調することが可能であろう。あるいはまた、グローバリゼーションの結果、ローカルの側からの抵抗、反発が起こる現象や過程もグローカリゼーションの一環として扱い得るであろう。さらには、グローバリゼーションが到達したにも関わらず、それを無視する、あるいはかかわりあいを持たないということも、グローカリゼーションの一つの現われ方と見なし得るであろう。

例えば、私がここ数年取り組んでいる体外受精や胚移植技術などの生殖補助医療 (ART) に関するグローカリゼーションについて考えて

みよう。ART は英国で1978年に確立された先端的な生殖技術である。確立後、ART はまたたく間に世界に拡大し、数年後には欧米先進諸国はもちろんのこと、日本をはじめとするアジアや南米、中東諸国にまで普及していった。しかしながら、すべての国で同じ ART 技術が導入されたわけではないし、同じ技術が導入された場合であっても、異なった意味付けが成されたのは良く知られていることである。

かくして、フランスやドイツでは代理出産を含めて提供卵子の使用など、かなりの ART 技術の導入が禁止された。一方、米国では、ART の扱いは州ごとの判断に委ねられ、商業的代理主産や卵子提供でさえもが容認される州がある一方で、そうした技術がすべて禁止される州もあった。また、イスラーム教国では、第三者が生殖に関与することをいっさい禁止した宗派もあれば（スンニ派）、「一時的な結婚」(temporary marriage) という「便法」を使って巧妙に提供精子による妊娠・出産を容認する宗派もあった（シーア派）。

こうした、個々のローカルの中で展開するグローバリゼーションの進行・浸透現象ないし過程を「グローカリゼーション」と規定する。

2) グローカリズム（グローカリゼーションが常態となった状態）

グローカリズムとは、グローカリゼーションが進行・浸透した結果生じるグローバルな状態を指すものとする。あるいは、それを当り前とみなすような考え方、さらには、その進展を指向するようなイデオロギーをも意味するものとする。

先に、グローバリゼーションとローカリゼーションが同時に進行す

「グローバル研究」の構築に向けて

る現象ないし過程をグローカリゼーションと規定した。が、グローカリゼーションの結果として考えられる状態・状況、あるいはそれを指向するイデオロギーは、グローバリゼーションとローカリゼーションを担う個人や組織、国家等の行為主体間の力関係によってさまざまな現れ方をするであろう。

グローバリゼーションの力が圧倒的に強い場合には、グローバルな社会・文化要素はローカルな場にそのまま導入され、定着するであろう。あるいは、「やり過ぎ」というやり方で、グローバル化した要素の導入や定着が無視されることもあろう。一方、ローカリゼーションの力が強い場合には、ローカルな場に合せて、グローバルな社会・文化要素が大きく変化させられるであろう。あるいは、グローバリゼーションが拒否されるかも知れない。

グローバリゼーションとローカリゼーションの力関係が、ある意味で伯仲している場合には、グローバルとローカルの要素がいろいろな程度に混合されたり、接合されたりすることとなろう。社会・文化の融合や混交、雑種化である。

ART を例に取るならば、提供卵子の利用に際し、日本では親密な関係にある姉妹間での卵子提供を可能にしようとするような動きがグローカリズムの一例と言えよう。

- 一九九
3) グローカリティ（グローバル化した状態に見られる特性や指向性）
グローカリティとは、グローカリゼーションの結果生じたグローバルな状態において、社会や文化に見られるグローバルかつローカルな

特性ないし指向性を意味するものとする。

例えば、人の移動、すなわち移民を例に取ってみると、グローバルな状態とは出身国の国籍を保持し、出身国に残してきた妻や子どもたちとの関係を維持したまま移民先国に居住することを意味するであろう。一方、ローカルな状態とは、ローカルな場に居住し、ローカルな人びととの間に社会的関係を築いていくことや、場合によっては移民先国で永住権や参政権を獲得したり帰化することを意味するであろう。この例の場合、グローバルな特性ないし指向性は、出身国と移民先国等の複数の国籍を保持する重国籍や永住権獲得への指向などとして表れるであろう⁽¹²⁾。

以上のような、近年の移民の在り方は、グローバルかつローカルな状態や指向性、すなわちグローカリティを持っていると言って良いだろう⁽¹³⁾。

4) グローカル・イマジナリー（グローバルな想像力）

グローバル・イマジナリーとは、グローカリゼーションという現象や過程、状態、特性によって、これまでとは異なった政治、経済、社会、文化的な事態が生じることを想像し、それに応じた新たな関係性を構想するような想像力を意味するものとする。すなわち、グローバルな文脈と同時にローカルな文脈を思い描くことができるようなグローバルな想像力を持つことを意味する。

例えば、地球規模の人と人の連帯の意識のもとで、ローカルな人びと同士が、首都や県庁所在地などの中央を経ずに直接関係を持つこと

「グローカル研究」の構築に向けて

などが考えられるであろう。国境を越えて結ばれる、地方都市同士の姉妹都市関係などがこの種の関係と言えよう。地球規模で関係を持つことが可能であるという前提のもとに、ローカルな場に住む人びと同士が直接関係を持ち、さまざまな交流を持つ姉妹都市関係の提携は、グローバルかつローカルな想像力・構想力、すなわちグローバル・イマジナリーがあって初めて可能となるのである。

以上、従来、グローカリゼーションないしグローカル化と一括されてきた諸現象ないし諸過程を4つの文脈の中に再配置してみた。以上の再文脈化が十分な説得力を持っているか否かは別として、グローカリゼーション、あるいはより一般的にはグローバリゼーションという包括的な言葉・概念の下に、これまでさまざまな現象や過程が明確に対象化されることもなく記述・分析されてきたことが明らかとなったであろう。グローカリゼーションがますます進行している現在、私たちは、少なくともグローカリゼーションをグローバリゼーションとは別個の研究対象・分野として分離し、さらに適用される文脈に基づいてグローカリゼーションを概念的に区分し、そうした区分におけるグローカル化の実態を明らかにすべきであると考ええる。

3. 「グローカル研究」の構想

一九七

私は、グローカリゼーションという概念を少なくとも以上のように4つの側面に分け、それぞれの側面を強調しつつ行う調査研究を「グ

ローカル研究」として構想している。以下、グローカリゼーション、グローカリズム、グローカリティ、グローカル・イマジナリーというそれぞれの側面を強調したグローカル研究の可能性について簡単に述べてみたい。

1) グローカリゼーション（グローカル化の過程）の文脈

グローバル研究においては、グローバリゼーションがしばしば欧米先進諸国の「中心」で始動し、それが発展途上国である「周縁」へと波及していくことが暗黙裡に前提にされているように思われる。その結果、グローバル研究においては「中心」の視点からグローバリゼーションやローカリゼーションの過程を見ることになる。その結果、グローバル研究では、グローバリゼーションの波を受けた「周縁」（ローカル）の側の受容や拒否、「やり過ごし」などの研究が疎かになる傾向にある。

これに対し、グローカル研究においては、ローカルな場に焦点を当てて「周縁」の視点を強調するので、グローバリゼーションに対応したローカルの側の受容や拒否、「やり過ごし」等を的確に対象化することができる。

2) グローカリズム（グローカルな状態）の文脈

グローカリズム、すなわちグローカル化が常態化した状態、ないしはグローカルな指向性に関する研究が想定されるであろう。

グローバリゼーションとローカリゼーションが同時に進行した結果

生じるグローカルな状態については、これまでクレオールとかハイブリッド（雑種）というような言葉ないし概念を用いて対象化されてきた。クレオールやハイブリッドという概念は主に、ある特定の文化的・社会的要素がグローバリゼーションの進行過程でローカルなものと遭遇、接触、融合した結果として生まれたものに焦点を当てる。

これに対し、グローカリズムは、ある特定の文化的・社会的要素がグローバリゼーションの進行過程でローカルなものと遭遇、接触、融合する、その状態に注目する言葉ないし概念と言えよう。例えば、国境や地域を越えた人やモノの多層的・多重的ないし多元的帰属状態に関する調査研究等が考えられ、その場合には、トランスナショナルイズム (transnationalism) の研究と重なることになるであろう。

3) グローカリティ（グローカリズムな状態に見られる特性）の文脈

グローカリティとは、すでに述べたように、グローカリゼーションが常態と化した場で見られる社会的、文化的な特性である。グローバルな特性とローカルな特性の両方の特性が同時に見られるということは、グローバルな場とローカルな場に同時に帰属する場合の特性ということに他ならない。

従って、例えば、すでに挙げた例ではあるが、移民の永住権の獲得や帰化を通じた多層的・多重的ないし多元的な帰属などに見られる社会的・文化的な特性を調査研究の対象とすることが可能であろう。あるいは、そうした現象・過程の調査研究が不可避となる、社会や文化のクレオール性やハイブリッド性の調査研究とも重なるであろう。

4) グローカル・イマジナリー（グローカルな想像力）の文脈

グローカル・イマジナリーを持ったローカルな人びとは、グローバルゼーションの中に組み込まれている「中心」と「周縁」の間の「力」の非対称（不均衡）に敏感になるであろう。そして、ローカル（「周縁」）から「中心」に向かって、逆方向にグローバルゼーションの波を起こす可能性を想像し、また、実際に試みるであろう。あるいは、より一般的には、「中心」を経ないで、ローカル（「周縁」）とローカル（「周縁」）が直接的に結び付くようなことも意図するであろう。

この種の、「中心」を経由しないローカルとローカルの結び付きの例としては、姉妹都市提携などが挙げられるであろう。あるいは、NGO や NPO などの非営利組織・団体を媒介とする環境保護問題への取り組みや世界各国に散在する先住少数民族の共闘関係などがこの種のグローカル・イマジナリーの実践例として挙げられるであろう。ローカルとローカルの直接的な結びつきは、これまでのグローバル研究の中では必ずしも十分に対象化されてこなかったものである。その意味で、グローカル・イマジナリーに焦点を当てたグローカル研究は、従来のグローバル研究で対象化されていなかった新たな社会的・文化的な現象ないし過程を対象化することができるのである。

以上、グローカリゼーションとグローカリズム、グローカリティ、グローバル・イマジナリーという4つの文脈から、グローカル研究の可能性を検討してみた。その結果、グローバル研究やこれまでの反グローバル研究では直接は対象化されてこなかった新たな調査研究の可

「グローカル研究」の構築に向けて

能性が多少なりとも明らかになってきたものとする。

おわりに

グローバリゼーションに伴う諸現象や過程、状態、特性、想像力等に関する研究はグローバル研究 (global studies) として一括され、日本をはじめ世界各地で精力的に進められてきている。今では、世界各国・各地でグローバル研究をもっぱらとする研究所ないし研究センターが開設・開所されている。また、高等教育機関においても、大学学部や大学院研究科等としてグローバル研究が世界各地で制度化されるに至っている。

一方、グローバリゼーションとローカリゼーションが同時に、しかも相互に密接に関連しながら進展するという意味で提唱されたグローカリゼーションについては、日本はもちろん、世界的に見てもほとんど研究が進んでいない。なぜなら、この種の研究はすべて、すでに確立されているグローバル研究の一環ないし一部として行われるべきだと考えられてきたからである。しかしながら、本小論で明らかにしたように、グローカリゼーションに伴う諸現象は、グローバル研究とは別個のグローカル研究として展開されるべき時期に来ている。

そこで、本小論では、グローカリゼーションを独自の調査研究対象とする「グローカル研究」(glocal studies) の構想を試みた。

その際、まず第一に、グローカリゼーションという言葉ないし概念の成立と、その後の文脈に応じた意味内容の拡張や変遷を歴史的に検

討した。その上で、そうした拡張や変遷の結果、グローカリゼーションという言葉ないし概念から分析概念としての有効性が失われてしまったことを確認した。

とすれば、グローカリゼーションという言葉ないし概念にいかにして分析概念としての有効性を取り戻すことができるのであろうか？

本小論では、拡張や変遷の結果意味内容があいまいとなったグローカリゼーションという言葉ないし概念を、概念上区別することを試みた。すなわち、これまでグローカリゼーションとして一括されてきたグローバルな現象（狭義のグローカリゼーション）やグローバルな状態（グローカリズム）、グローバルな状態に見られる特性（グローカリティ）、そしてグローカリゼーションを念頭においた想像力（グローバル・イマジナリー）等を概念上区別することとした。そしてさらに、そうしたそれぞれの概念区分に対応した調査研究の可能性を検討し、そうしたすべてのグローカリゼーションに関する研究を「グローバル研究」として構想することを提示した。

本小論を通して提示した「グローバル研究」の構想に基づけば、一つには、グローバリゼーションを前提としつつも、ローカルな場に焦点を置いた研究が可能となる。また、グローバル研究で見落とされ勝ちであった、グローバルな場におけるローカルとローカルの直接的な結びつき（例えば、姉妹都市関係）等を新たな調査研究対象とすることも可能となる。さらにまた、より重要なこととして、グローバル研究の構想は、グローバル研究において暗黙の前提となっている「中心」（グローバリゼーションの起点）と「周縁」（グローバリゼーション

「グローバル研究」の構築に向けて

ンの終点)との間の力の非対称性(不均衡)を顕在化させ、対象性(均衡)を取り戻す可能性をも視野に入れた調査研究を可能にする。

21世紀初頭の現代の社会や文化を象徴するキーワードをいくつか挙げるとするならば、グローバリゼーションは間違いなくその一つとなるであろう。20世紀末にはグローバル研究が開始され、すでに20年以上の時を経た。にもかかわらず、グローバリゼーションとローカリゼーションが同時かつ相互に密接に影響を及ぼしながら展開するグローカリゼーション概念の重要性はいまだに十分に認識されているとは言いがたい。そういう意味で、グローバリゼーションとローカリゼーションの共振を対象化する「グローバル研究」が今こそ必要とされているということができよう⁽¹⁴⁾。本小論が、そうしたグローバル研究を構想する議論の発端の一つとなれば幸いである。

注

- (1) グローバリゼーションないしグローバル化(globalization)やグローバリズム(globalism: グロール化した状態)という用語の初出は1961年とされる(*The Oxford English Dictionary* (2nd ed.), vol. 6, 1989: 582)。しかしながら、これらの言葉が社会科学の専門用語として定着し、さらに一部のマスメディアで登場するようになるのは1980年代半ば以降、特に1990年代以降である。わが国で日常的に使用されるようになったのは、比較的最近のことに過ぎない(大谷2008: 4-7参照)。
- (2) *Oxford English Dictionary of New Words* (1991)によると、「グローバル化する」(globalize)という言葉は、日本企業が使用していたマーケティング戦略、すなわち、グローバルに展開して現地のニーズに合わせる戦略(global localization)に由来するという。さらに、こうした日本企

業の戦略は、外来の農業技術を日本の風土に合わせて「土着化」(dochakuka) するという日本の伝統に淵源をたどるといふ (Robertson 1992: 173-174 参照)。しかしながら、世界市場に進出・拡大しつつあった1980年代後半当時の日本企業のマーケティング戦略は「土着化」ではなく、「現地化」であったと思われる。真偽の確認は今後の検討課題としたい。

- (3) 日本では、近年、道州制の導入等、地方への政治的・経済的権限の移譲がマスメディア等で議論されるようになってきているが、グローカリゼーションは特にこの種の「地方の時代」を標榜する議論の文脈で使われるようになってきている (神田外語大学国際社会研究所 (編) 2009参照)。
- (4) リッツア (1999) 参照。
- (5) Featherstone and Lash (1995) は、グローバリゼーションの「均質化論者」(homogenizers) と名付けている。なお、「均質化論者」としては、A. ギデンスやマルクス主義ないし機能・構造主義研究者が挙げられるという。
- (6) Featherstone and Lash (1995) は、グローバリゼーションの「異質化論者」(heterogenizers) と名付けている。なお、「異質化論者」E. サイードや H. K. バーバ、S. ホールらが挙げられるという。
- (7) Sara Tulloch (comp.), 1991, *The Oxford Dictionary of New Words: A Popular Guide to Words in the News*, p. 134 参照。
- (8) 大谷 (2008: 6-7) によると、R. ロバートソンが最初にグローカリゼーションという言葉が学術用語として使用したのは、1992年にドイツで開催された「グローバル文明とローカル文化」に関する学会でのことであったという (発表タイトルは、On the Concept of Glocalization: The Limitations of the Local-Global Distinction)。ただし、R. ロバートソン自身が明記しているように、グローカリゼーションという言葉は、1980年代からすでに使われていた。
- (9) それゆえ、ロバートソンらが編集したグローバリゼーションに関する論文集 (Featherston, Lash and Robertson 1995) のタイトルは単数の modernity ではなく、複数の modernities (*Global Modernisities*) を使用し

「グローカル研究」の構築に向けて

ている。

- (10) グローバリゼーションに見られる「中心」と「周縁」の間の「力」の非対称性ないし不均衡については、その概略を拙稿（上杉 2009a, 2009b）ですでに述べた。詳しくは稿を改めて論じたい。
- (11) M. B. Steger (2009: 8–10) の概念区分では、グローバリズム (globalism) は特に定義されていない。ごく一般的な用法に従って、グローバリゼーションにまつわるイデオロギー（主義）をグローバリズムと表現している (2009: 98–99)。これに対し、本小論では、トランスナショナリズム (transnationalism 「トランスナショナルである状態」) における「状態」としての用法にならない、グローカリズムを「主義」としてではなく「状態」とみなすので特に注意を喚起しておきたい。
- (12) 近年、世界の約半分近くの国が、移民が重国籍を持つことを容認している。
- (13) 移民研究の文脈では、出身国の国籍を維持しつつ移民先の永住権を獲得したり重国籍を持つような場合に見られる特性は「トランスナショナルリティ」(transnationality: 越境性) と言うこともできよう。
- (14) こうした問題意識から、成城大学民俗学研究所では、「グローカル化時代に再編する日本の社会と文化に関する地域・領域横断的研究」(通称「グローカル研究」、研究代表：松崎憲三成城大学民俗学研究所長) が、文部科学省の平成20年度 (2008年度) 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 (研究拠点を形成する研究) に採択されたことを契機として、平成20年 (2008年) 10月、民俗学研究所の下にグローカル研究センターを新たに設置した。

参考文献

- 一
八
九
- Abercrombie, N., S. Hill, and B. S. Turner
2000, *The Penguin Dictionary of Sociology* (4th ed.), London: Penguin Books.
- Featherstone, M., and Scott Lash

- 1995, *Globalization, Modernity and the Spatialization of Social Theory: An Introduction*. In Featherstone, M., Lash, Scott, Robertson, R. (eds.), *Global Modernities*, London: Sage Publications, pp. 1–24.
- Featherstone, M., Scott Lash, and Roland Robertson (eds.)
1995, *Global Modernities*, London: Sage Publications.
- ギデンス, アンソニー (佐和隆光訳)
2001, 『暴走する世界—グローバリゼーションは何をどう変えるのか』東京:ダイヤモンド社。
- 平松守彦他
1997, 『地方から日本を変える—グローバルな19人のメッセージ・平松守彦対談集—』PHP 研究所。
- 伊丹敬之
1991, 『グローバル・マネジメント—地球規模の日本企業—』日本放送出版協会。
- 神田外語大学国際社会研究所 (編)
2009, 『グローカリゼーション—国際社会の新潮流—』神田外語大学出版局。
- Macionis, John J., and Ken Plummer
2008, *Sociology: A Global Introduction* (4th ed.), Harlow (Essex), England: Person Education.
- マクルーハン, マーシャル (森常治訳)
1986, 『グーテンベルクの銀河系—活字人間の形成—』みすず書房。
(McLuhan, Marshall, 1962, *The Gutenberg galaxy: The Making of Typographic Man*, University of Toronto Press)
- 1987, 『メディア論—人間の拡張の諸相—』。(McLuhan, Marshall, 1964, *Understanding Media: The Extensions of Man*, Routledge)
- マクルーハン, マーシャル, パワーズ, B. R.
2003, 『グローバル・ヴィレッジ—21世紀の生とメディアの転換—』青弓社。
- 前川啓治

「グローバル研究」の構築に向けて

2004, 『グローカリゼーションの人類学—国際文化・開発・移民—』新曜社。

岡戸浩子

2002, 『「グローバル化」時代の言語教育政策—「多様化」の試みとこれからの日本』くろしお出版。

恩田守雄

2002, 『グローバル時代の地域づくり』学文社。

大谷裕文

2008, 「序」, 大谷裕文 (編) 『文化のグローカリゼーションを読み解く』弦書房, 4-10頁。

リッツア, ジョージ (正岡寛司訳)

1999, 『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版会。(George Ritzer, *The McDonaldization of Society: An Investigation into the Changing Character of Contemporary Social Life*, Pine Forge Press, 1993)

Robertson, Roland

1992, *Globalization: Social Theory and Global Culture*, Sage. (抄訳: R. ロバートソン [阿倍美哉訳] 『グローバリゼーション—地球文化の社会学理論—』東京大学出版会, 1997)

1995, Glocalization: Time-Space and Homogeneity-Heterogeneity. In Featherstone, M, Lash, S. and R. Robertson (eds.), *Global Modernities*, London: Sage Publications, pp. 25-44.

Simpson, J. A., and E. S. C. Weiner (prepared)

1989, *The Oxford English Dictionary* (2nd ed.), Oxford: Oxford University Press.

Steger, Manfred B. (comp.)

2009, *Globalization: A Very Short Introduction*, Oxford: Oxford University Press.

Tulloch, Sara (comp.)

1991, *The Oxford Dictionary of New Words*, Oxford: Oxford University Press.

上杉富之

2009a, 「グローバル研究の構想—社会的・文化的な対称性の回復に向けて」上杉富之・及川祥平（編）『グローバル研究の可能性—社会的・文化的な対称性の回復に向けて—』成城大学民俗学研究所グローバル研究センター, 14-26頁。

2009b, 「社会的・文化的な対称性の回復に向けて—成城大学民俗学研究所グローバル研究センターの設置とその取組み—」『成城教育』146号（印刷中）。